



TITLE:

木曽山系に連続分布をするニホンザルの群れのグルーピングに関する研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

田中, 進

CITATION:

田中, 進. 木曽山系に連続分布をするニホンザルの群れのグルーピングに関する研究(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1981, 11: 37-37

ISSUE DATE:

1981-12-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162996>

RIGHT:

2. 研究会課題

研究会課題に関しては従来からの研究会をも含めて設定課題ごとに対応する研究会に整理統合する方針で募集し以下の8件が採択された。

1. 課題Ⅰ「群れの統合機構に関する研究」
2. 課題Ⅱ「各環境構造における霊長類の適応機序の解明」
—そのとらえ方と意義—
3. 課題Ⅲ「霊長類の成長・発達」
—発達段階を考える—
4. 課題Ⅳ「霊長類の系統・種分化・種の特性に関する研究」
—生化学的レベルの研究を中心にして—
5. 「第8回行動研究会」
—攻撃性の調整—
6. 「第7回脳と行動研究会」
—感覚情報処理と階層性—
7. 「第10回ホミニゼーション研究会」
—チンパンジーをめぐる諸問題—
8. 「哺乳類の初期発生に関する研究会」

(竹 中)

2. 研 究 成 果

設定課題 1.

群れの統合機構に関する研究

木曾山系に連続分布をするニホンザルの群れのグルーピングに関する研究

田 中 進

1980年4月から1981年3月までの調査で次の3点が特徴的かつ興味深い現象であった。

- (1) 倉本群(K群)の冬期の利用地域は、標高の低いところよりむしろ高いところであった。
- (2) 隣接する2群が出会うことは稀れであったが、出会った際、群れ間にトラブルはみられなかった。
- (3) 群れの上空約100 mをクマタカ(天敵?)が旋回したが、ほとんどの個体は林内にいて何らのトラブルも起らなかった。ただ、オトナオス(尾を上げていた)と5~6才のオスの2頭は林外にいた。

以上の3点について以下若干の補足を加える。

1月から2月にかけて、K群はそれまでよく利用していた標高1100 m以下の地域をほとんど遊動しなくなった。ただし沢筋は利用していたと考えられる。冬期に標高の低い地域をあまり利用しなかった要因として次の5点が考えられる。①冬期は猟期であり、特に低標高の地域にはハンターや猟犬が入山している。②標高の高い地域でも積雪量はそれほど多くなく、標高1100 m地点で約40 cm(1981年2月)である。サルにとって生活する上で支障になるとは考えにくい。③標高の高い地域でも比較的食物となる植物は豊富である。④二次林を含む自然林が標高に沿って連続分布しており、生息地として適当な地域が標高の高いところにもある。⑤元来K群の遊動域は標高の高い地域であった。しかし、②と③については調査年のみに特異的にみられた事象かもしれない。

群れと群れとが出会った際、一方の群れの個体しか警戒音を発しなかった。

天敵であろうといわれているクマタカと群れが相遇する瞬間を観察できたが、群れ内に混乱もしくは緊張がみられなかったのは、ほとんどの個体が林内にいたためと思われる。